

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行など、予測困難な社会が現実のものとなった今、未来の社会を築く子どもたちの教育を、どのように描いていけばよいのでしょうか。本連載では、教育の最先端で活躍する人たちへのインタビューから、次代の教育のあり方に迫ります。第5回は、発達障害のある子どものための普通教育を行うコースを持つ明蓬館高校校長・理事長の日野公三先生に、発達上の特性を持つ生徒の支援に取り組む思いや、そこから見えてきた教育の目指すべき姿についてお話を聞きました。

## 他者をリスペクトする風土を育むことが、個別最適な学びへの第一歩



内閣府認定特区高等学校  
明蓬館高校 校長・理事長  
日野公三

**ひの・こうぞう** 1959年愛媛県大洲市生まれ。1999年に株式会社アットマーク・ラーニングを設立し、2000年に国内初のインターネットを使った通信制高校を開校。2004年には広域・単位制の通信制高校であるアットマーク国際高校を開校した。2009年には明蓬館高校を設立。「不登校や発達障害のある子どもたちを救う」という志の下、新しい教育機会の創出を続ける。NPO日本ホームスクール支援協会理事長、NPOソーシャル・ビジネス・ネットワーク理事、新しい学校の会理事などを務める。主な著書に『発達障害の子どもたちの進路と多様な可能性』（WAVE出版）。

### キーワード 1

#### 障害のある子どものスペシャルニーズ\*1

—日野先生が、発達障害を始めとする発達面に課題のある子どもたちを対象とした、特別支援教育に携わろうとしたきっかけを教えてください。

**日野** 教育に関する事業を立ち上げていた私が、1990年代後半に、アメリカの教育現場を視察したことが発端です。音声入力や文字の読み上げなど、ICTを活用した先進的な特別支援教育に驚かされました。ただし、何より感銘を受けたのは、アメリカの教員たちの「障害のある子どもは、学びについての特別な注文（スペシャルニーズ）の持ち主だ。彼らのニーズに応えることで、私たちは教育について多くのことを学ぶことができる」という言葉でした。障害のある子どもたちから、よりよい未来の教育を学ぶ——。その時に私の中に生まれた新しい視点は、ずっと頭の中から消えることはありませんでした。

そんな私が、本格的に特別支援教育にかかわるきっかけを得たのは2008年です。自閉症のある作家、詩人として後に世界的に知られるようになる東田直樹さん\*2が、アットマーク国際高校に入学を希望してきたのです。同校は、石川県白山市が学校設置許認可者ですが、インターネットにアクセスできる環境があれば世界のどこからでも入学できる、日本で初めての特区高校です。中学校卒業まで養護学校で学んだ東田さんは、高校では普通科の教育課程で勉強したいと考えましたが、近隣の高校には受験すら認めてもらえませんでした。ところが、本人と面談してみると、確かに言葉を介したやり取りは難しいけれど、パソコンやタブレット端末を使った学びは小学校から続けてきたこ

\*1 発達障害を始めとする発達の違いや身体の障害などによる様々な支援の必要性を表す言葉。

\*2 東田直樹さんが13歳の時に執筆した『自閉症の僕が跳びはねる理由』（エスコアール、角川文庫）は、世界30か国以上で翻訳・出版され、世界的ベストセラーになった。

## SNECでの学び

SNECの登校のベースは、本人の希望なども踏まえ、「スクールコーチング（通学）コース」と「ネットコーチング（在宅）コース」から選び、決定される。時間割は、生徒が教員や支援員と相談して作成。一斉授業の代わりに、パソコンやタブレット端末でオンライン授業を視聴し、レポートに取り組む。教科学習だけでなく、ソーシャルスキルを学ぶために、状況によって他人がどんな気持ちで、自分はどのように振る舞うとよいかを考えるカードゲームを取り入れた授業もやっている。小・中学校9年間で1日も登校しなかった生徒が、本人の興味・関心を尊重したカリキュラム編成の下、安心して学びに取り組み、自身の探究の成果をレポートにまとめたことがきっかけで、教科書を使った学びにも積極的に取り組むようになったこともあるという。

◎SNECの詳細は、下記ウェブサイトをご覧ください。  
<https://www.at-mhk.com/style/snec.html>

## 【全国のSNECネットワーク】※中等部を併設

直営施設所在地 [関東] 東京都品川区(※)・国立市(※)、神奈川県横浜市(※)・厚木市(※)、[九州] 福岡県福岡市

サポート施設所在地 [東北] 宮城県仙台市、[関東] 群馬県前橋市、栃木県栃木市、埼玉県朝霞市、東京都多摩市、[中部] 長野県長野市、静岡県浜松市、岐阜県岐阜市・可児市・下呂市・土岐市、愛知県名古屋(2か所)・岡崎市・江南市・春日井市・西尾市・刈谷市、[近畿] 三重県鈴鹿市、滋賀県草津市、奈良県生駒市、大阪府東成区、[九州] 福岡県北九州市・久留米市

とから可能だと分かりました。東田さんから学びの機会を奪ってはならないと、私たちは東田さんの支援と伴走を注意しました。そして、自閉症を始めとする発達障害のある子どもを積極的に受け入れる通信制の高校をつくろうと考えたのです。そうした思いに賛同し、廃校となった小学校の校舎を本校舎として貸してくれたのが、福岡県田川郡にある川崎町でした。東田さんとの出会いからわずか1年で、通信制の明蓬館高校を開校しました（下記コラム）。

—発達障害のある高校生の学びの場として、明蓬館高校から発展的に誕生したSNEC（スペシャルニーズ・エデュケーションセンター）について教えてください。

**日野** 発達障害のある子どものスペシャルニーズに対応する教育は、試行錯誤の連続でした。そこでの気づきや反省を踏まえて、2013年度に、発達上の特性を持つ子どもたちに特化した学びの場として明蓬館高校に設置したのが、特別支援教育コースであるSNECです。

SNECでは、発達障害の支援スキルを持った福祉支援員と臨床心理士などの資格を持つ心理相談員が常駐し、各教科の教員とチームを組んで、子どもたちの支援にあたります。福祉支援員が学習面・行動面・対人関係面を、心理相談員が生徒と保護者両方の相談支援・計画相談を担当することで、発達に課題を持つ高校生が普通科高校教育を安心して受けることができるのです。

SNECの授業は、パソコンやタブレット端末でのオンライン授業の視聴が中心で、自分の興味やペースに合わせて学ぶことができます。すべての教科・科目の学習評価では、テストに加えて、時間をかけて取り組む研究レポートや創作活動など、「マイプロ<sup>\*3</sup>」と呼ばれる学習成果物も対

象になります。

発達特性に合った学習環境を整えることで、子どもたちは大きく成長します。例えば、板書の内容を記憶し、ノートに書き起こす力に課題があり、中学校から不登校になった子どもでも、ICTを活用して勉強することで、学びの意欲を取り戻し、上級学校への進学を希望するといったケースも珍しくありません。

—今年度、SNECの「中等部」を開設されたそうですね。

**日野** スペシャルニーズを持つ中学生のためのSNEC「中等部」を2021年度に開設しました。現在、SNECは全国21か所（2022年度は28か所予定）で展開していますが、そのうちの4か所に「中等部」を併設しています。子どもたちは、それぞれの中学校に籍を置きつつ、SNECに通ったり、オンラインを活用したりしながら学び、在籍中学校の卒業資格を得ます。高校生向けのSNEC同様、「マイプロ」にも取り組みます。

中学校では教科担任制になり、授業や学校行事も小学校以上に多彩になるため、発達障害の子どもたちが苦手とする未経験の場面が日々連続します。しかし、発達障害に関する専門知識を持ち、対応できる教員は、中学校現場にはまだ少ないのが現状です。そうした状況に対して不安を感じた保護者の声に背中を押されて、SNEC「中等部」をスタートさせたのです。

## ●町の新しい学校として地域とともに

福岡県・川崎町は、内閣府から、豊かな自然や文化を活用した「地産・地習・e環境教育特区」として認定された。明蓬館高校は、同町より、2009年に認可された広域通信制課程の単位制、普通科（男女共学）の一条校（学校教育法第一条に定められた学校）だ。校舎は町の地域交流センターでもあるため、学校と地域との交流が活発に行われ、年に2回の学校審議会には、教育委員会や地域のキーパーソンも参加して、学校のあり方に関して積極的な助言をする。学校設定科目の中に川崎町の歴史と自然、地域資源にちなむ選択科目があるが、それは地域との話し合いの中で生まれたものだ。

文化祭などの学校行事には地域住民が積極的に参加。入学式には、新入生を歓迎する地域住民が、数多く出席する。



\*3「マイプロ」は、マイプロジェクト、マイプロデュース、マイプロダクト、マイプロフェッショナルなどの意味を持ち、積極的、能動的な学びを促進する成果物学習。

## 他者をリスペクトする風土

—日本の教育界では「個別最適な学び」を目指して改革が進んでいます。「個別最適な学び」は、どのようにすれば実現できると考えますか。

**日野** 明達館高校では、生徒は「マイページ」(下図)と呼ばれる独自の学習システムを使って、インターネットを利用した学習を進めることができます。「マイページ」では、オンライン授業の視聴、学習記録の保存、教科担任とのやり取りなどが可能で、生徒がそれぞれのペースに合った学習を進める土台となっています。

しかし、「個別最適な学び」の実現には、ICT環境の整備以上に、学校における「他者への尊敬」「異なる価値観の受容」が欠かせません。教職員、生徒双方に他者をリスペクトする風土が必要です。そうした文化が学校にあれば、学校は子どもたちにとって「安心・安全な場」となり、子どもたちは思う存分チャレンジができるはずです。さらに、「教員と生徒の対等な関係」も必要です。授業の進め方、行事の運営や校則の改訂などに子どもたちが積極的に関与して、学校の意思決定に子どもたちがかかわることが重要です。そうして、学校のすべての活動が、子どもたちの「自立と自律」を促す場として機能しているかを、教員自身が検証しなければなりません。

その上で、特に、特別支援教育においては、もっと「科学的エビデンス」を重視し、心理検査の実施と検査結果を読み取るための研鑽が不可欠です。なぜなら、検査結果は、子どもたちの困り感などを伝える、子どもたちのもう1つの声だからです。

そのように、「個別最適な学び」を行うためには、教員自身の学校に対する認識を変えることが必要です。学校観、



図 独自の学習システム「マイページ」では、オンライン授業の閲覧や教員とのやり取りのほか、各教科の学習資料のダウンロード、レポートの提出なども可能。

子ども観が旧態依然のままでもICTを導入しても、「個別最適な学び」は実現しないでしょう。

—ICTは「個別最適な学び」のツールでしかなく、最も大切なのは教員の態度変容だというわけですね。

**日野** そうです。学校で、教職員・生徒の間に「他者をリスペクトする風土」がある状態でICTを活用すれば、驚くべき力が発揮されます。音声、画像、動画などを駆使すると、子どもたちの興味・関心が刺激され、理解が促されることは多くの先生方が実感しているでしょう。ICTの導入は、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもの学びをよりよくします。

ただ、ICT導入の効能を最大限に引き出すため、教員には、過去の成功体験や経験だけに頼らず、マインドセットをして教育に向き合うことが求められます。本校でも授業や家庭学習にパソコンやタブレット端末を導入することで、授業中の発言が苦手だった子どもが見事なレポートを提出したり、探究学習の成果を動画などでまとめたりして、それまでの一斉授業では目立たなかった子どもや、評価の対象になりにくかった資質・能力が浮かび上がってきました。その結果、授業ごとにいろいろな子どもが交代で主役を務めるようになりました。ICTを効果的に活用した授業は、講義中心の一斉型授業よりも、子どもの主体的に学ぶ態度を育み、思考力や判断力、表現力を存分に発揮させるのです。

## 履修主義から習得主義へ

—新型コロナウイルスの感染拡大を契機に、オンライン学習に取り組む学校が増え、不登校の児童生徒には学びのチャンスが広がったという声もあります。日野先生は、コロナ禍での学校の変化をどのように受け止めていますか。

**日野** オンライン学習は、子どもたちにとって「学びに直結する」ということを実感するチャンスでした。教室に行かなくても、オンラインですぐに学びがスタートでき、動画教材は自分のペースで繰り返し見ることができます。そうした学びへの直結感は、発達障害の子どもたちにとって歓迎すべき変化だったと思います。発達障害の子どもたちの中には、授業中の周囲の話し声や教室の掲示物、さらには先生のちょっとした癖が気になって、学びに集中できずに苦労していることが少なくないからです。

コロナ禍を経験しても、「勉強は学校に行き行って取り組むもの」という考えは大きくは変わっていないと思います。しかし、日本の教育は、履修主義から習得主義へと舵を切っているはずですが、出席したかどうかだけではなく、何を学んだのか、何が身についたか、何ができるようになったのか

を重視してほしいと思います。そして、学校の主役が子どもだと考えるのであれば、学習評価についても、子どもたち一人ひとりにあてる物差しを変えるべきではないでしょうか。ペーパーテストだけでなく、スタディログ(学習履歴)なども活用して、本人の成長を総合的に評価していく仕組みが求められていると思います。

キーワード 4

## 社会に開かれた学校へ

— これからの教育をともに創造する仲間として、自治体や小・中学校の教育関係者に伝えたいことはありますか。

**日野** 学校は、これまで自己完結をし過ぎていたかもしれません。これからは、「社会に開かれた教育課程」を目指し、地域の人的資源や物的資源を柔軟に活用できる学校へと変わり、地域や企業ともしっかり連携すべきだと思います。

現在、SNECでは、相互視察や、支援を必要とする子どもについて個別に話し合う「ケース会議」の進め方の勉強会などを、横浜市立中学校と行っています。公立中学校の先生方は、知能検査や発達検査を、私たちがどのように実施し、その結果をどう読み取り、個別指導計画の作成につなげているかを知ると、「自分たちは、これまで経験と勘だけを頼りに子どもたちに向き合っていたのだと気づかされた」と驚きます。今後も、子どもたちのために、要望があれば、SNECのノウハウをお伝えしたいと考えています。

民間の立場で特別支援教育にかかわる私たちも、今後も子どもたちのために様々な分野の人たちと連携していきます。最も力を入れているのは医療機関との連携で、既に群馬県前橋市と長野県長野市で、医療法人と一緒にSNECサポート校を開設・運営しています。興味深いのは、医療と教育、さらには福祉など、立場の違う人が集まると、1人の子どもに関する見立てが異なることが少なくないということです。医師が「今は治療と休息が必要だ」と考えていた子どもについて、私たちが「学校でこんな興味を見つ



発達障害のある子どもたちへの教育には、教育、医療、福祉が密接に結びつくことが必要です

けて学びに没頭しています」という状況を伝えると、驚かれることもよくあります。いろいろな視点で子どもを捉え、子どもにとってよりよい支援を考えることが大切なのだと思います。

— 日野先生が描く理想の教育について教えてください。

**日野** 変化が予測できない社会で、生きる力を子どもたちに育むためには、学校のあり方は大きく変わるべきですし、すべてを学校が担うことも不可能だと思います。一人ひとりの子どもたちが、自分に合った個別最適な教育を受けられるようになった時には、皆が決まった時間に学校に行き、同じ授業を受けるのではなく、ICTを駆使して、自宅などでそれぞれのペースで学ぶようになっていくと思います。ただ、その時にも学校は存在します。「今日は〇〇先生の授業を受けてくる!」「今日は友だちと作品を作る」などと、子どもたちが自分の意思で学校に行き、学びを深める——。そんな日が来ると信じています。

日野先生とウェブ上で対話しませんか

### From the front-runner

本誌では語り尽くせなかったお話を動画でご視聴いただけます。

### To the front-runner

日野先生へのご質問や、ご意見・ご感想をお寄せください。本コーナーの内容に関するもののほか、特別支援教育に関することも大歓迎です。日野先生ご自身からの回答はウェブサイト上に公開します。

※ご質問内容によっては、公開を控える場合もございます。ご了承ください。

Web VIEW n-express もご覧ください

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内の『VIEW n-express』コーナーでは、日野先生のメッセージ動画をご覧いただけます。日野先生へのご質問も受け付けています。

VIEW n-express 検索

右記の2次元コードから動画と質問フォームのページにダイレクトにアクセスできます。▶▶▶

